

令和 7 年度病虫害発生予報 第 6 号（10 月予報）

今月の発生に注意を要する病虫害

作物名	病虫害名	発生時期	発生量
カキ	フジコナカイガラムシ	平年並	やや多い
ナス	うどんこ病	平年並	やや多い
ネギ	ネギアザミウマ	平年並	やや多い
野菜類・花き類共通	シロイチモジヨトウ	平年並	多い
	オオタバコガ	平年並	多い

○気象予報（近畿地方の 1 ヶ月予報：9/27～10/26）

気温：平年より高い確率 80% 降水量：平年より多い確率 40%、
日照時間：平年より少ない確率 40%

○今月の農薬適正使用のポイント

- ①アブラナ科野菜を間引き菜で収穫する場合は、農薬製剤ラベルに記載された使用上の注意事項をよく読んで、間引き菜で使用する農薬を使用しましょう。
- ②農薬のラベルに記載された適用作物名について、思い込みや読み違いによる誤使用が起こる可能性があります。「トマトとミニトマト」、「ピーマンとシシトウ」、「ネギとワケギ」、「実えんどうとさやえんどう、えんどうまめ」などは、いずれも農薬登録内容が異なります。このほかにも、判断に迷った場合には各農林(農業)振興事務所または病虫害防除所へお尋ねください。

○今月の病虫害対策のポイント

- ①冬作物の栽培が始まっています。冬作物では、秋に苗で持ち込んだ病虫害や飛来する害虫を徹底防除して、冬に残さないことが基本です。結球するアブラナ科では結球するまで、施設栽培ではハウスサイドを閉め切るまでが勝負所です。農薬への抵抗性発達状況などにも留意しながら、効率的に防除してください。
- ②イチゴの施設栽培で天敵製剤を利用する場合は、天敵への影響日数を考慮して農薬を選ぶとともに、葉かきと防除作業を放飼までに済ませておき、放飼後 2 週間程度はこれらの作業を控えましょう。今年始めて導入する場合は、最寄りの農林(農業)振興事務所などの指導を受けて下さい。

I. 普通作物

1. 水 稲

(1) トビイロウンカ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 9 月下旬の巡回調査では、発生を認めていません。

防除上の注意事項

- 1) 直ちに警戒が必要な状況ではありませんが、トビイロウンカに効果の高い箱粒剤を使用していない場合は、念のため株元をよく観察して下さい。
- 2) 株あたり 3 頭以上の寄生や「坪枯れ」の前兆の黄化を認めた場合には、早急に防除を行います。薬剤の選定は収穫前日数を考慮して選びます。薬剤は株元にかかるように散布してください。収穫の近い水田では、収穫適期の範囲内で早刈りしてください。

Ⅱ. 果樹・チャ

1. カキ

(1) 炭疽病

予報内容 **発生時期**： 平年並 **発生量**： やや少ない

予報の根拠

- 1) 9 月中下旬の巡回調査では、発病果率 1.2% で平年に比べてやや少なかったです。

防除上の注意事項

- 1) 薬剤散布のみで発病果から健全果への二次伝染を防ぐことは難しいので、発病した果実や新梢は見つけ次第、必ず除去して園外で処分します。
- 2) 感染は 10 月以降も続きますので、富有の発生園ではミギワ 20 フロアブルまたはナリア WDG による追加防除を実施します。
- 3) 台風や長雨後には、直ちに治療効果を有し、炭疽病に登録がある薬剤を散布し、感染拡大を防止します。

(2) フジコナカイガラムシ

予報内容 **発生時期**： 平年並 **発生量**： やや多い

予報の根拠

- 1) 9 月中下旬の巡回調査では、被害果率は 4.5% で平年に比べてやや多かったです。

防除上の注意事項

- 1) 被害の多い園地では次作にむけた対策を考えます。被害の多い箇所は薬液が十分かかっていない可能性がありますので、収穫時に被害果が多い箇所に印をつけておき、薬液がかかりやすいように冬期に縮・間伐や剪定をします。
- 2) 幼虫は粗皮の下で越冬しますので、冬期に粗皮削りを励行します。

2. 果樹共通

(1) カメムシ類（チャバネアオカメムシ・ツヤアオカメムシ・クサギカメムシ）

予報内容 **発生時期**： 平年並 **発生量**： 平年並

予報の根拠

- 1) 予察水銀灯によるチャバネアオカメムシの誘殺数は、9 月初旬に一部の調査地点で 50 0 頭／日を超えました。果樹・薬草研究センターにおいては 9 月初旬から 30 頭／日を超える日が多く、9 月 15 日に最も多い 84 頭／日となりました。
- 2) 県内カキ園地 32 カ所の巡回調査では、被害果率は 1.0 % で平年に比べて少なかったです。
- 3) 県内 7 地点で採取したヒノキ毬果の平均口針鞘数は 4.4 本／果と、8 月下旬の調査(0.1 本／果) からやや増加していますが、毬果からカメムシが離脱する目安である 25 本／果を下回っています。

防除上の注意事項

- 1) 気温の低下とともにカメムシ類の活動は低下しますが、気温の高い日や台風の通過後にはカメムシの動きが活発になりますので、園地をこまめに観察し、飛来・被害が見られた場合は直ちに防除します。
- 2) カキの収穫期に入っていますので、防除する場合は収穫前日数等の登録内容をラベルで必ず確認するとともに、隣接園へのドリフト防止に十分留意します。

3. チャ

(1) 炭疽病

予報内容 **発生時期**： 平年並 **発生量**： やや少ない

予報の根拠

- 1) 9 月下旬の調査では、調査茶園における発生は確認されませんでした。

防除上の注意

- 1) 秋雨前線が停滞する場合、7～10日間隔で2回防除します。

(2) カンザワハダニ

予報内容 **発生時期： 平年並** **発生量： 平年並**

予報の根拠

- 1) 9月下旬の調査では、発生圃場率は37.5%、寄生葉率は0.61%でした。

防除上の注意事項

- 1) 早期発見に努め、低密度での防除を徹底します。
- 2) 発生の多い圃場では、整枝後に葉裏に薬剤がかかるよう丁寧に防除します。

(3) チャトゲコナジラミ

予報内容 **発生時期： 平年並** **発生量： 平年並**

予報の根拠

- 1) 9月下旬の調査では、発生圃場率は87.5%でした。

防除上の注意事項

- 1) 発生の多い圃場は、茶株すそ部の成葉に黒いすす状のものが多く付着しています。そのような圃場では10月下旬以降にマシン油乳剤（商品名：トモノールS、ラビサンスプレー）で防除します。この時期の防除は次年度の密度抑制効果が高く、1～2月に2回目の散布を行うと、より効果が高まります。
- 2) 茶株すそ部を中心に葉裏に良くかかるように散布します。

Ⅲ. 野菜類・花き類

1. イチゴ

(1) 萎黄病

予報内容 **発生時期： 平年並** **発生量： 平年並**

予報の根拠

- 1) 9月下旬の巡回調査では、発生を認めていません。

防除上の注意事項

- 1) 定植後に展開してくる新葉をよく観察します。奇形や黄化および生育抑制が認められる株は、見つけ次第抜き取り、ほ場を汚染しないよう必ず肥料袋等に入れて離れた場所に持ち出します。被害株を育苗ほ場周辺等に放置すると、ほ場が汚染され、翌年以降の発生原因となります。
- 2) 夏期の太陽熱消毒を実施した本圃で発生した場合は、育苗ほ場で感染していたと考えられます。次年度に向けて、育苗ベンチやポットなどの資材の消毒あるいは更新を行います。また発生が年々増加している場合には、育苗施設の太陽熱消毒を検討します。

(2) うどんこ病

予報内容 **発生時期： 平年並** **発生量： 平年並**

予報の根拠

- 1) 9月下旬の巡回調査では、発生を認めていません。
- 2) 10月後半以降に気温が低下した場合、発生ほ場では病勢が進展します。

防除上の注意事項

- 1) 出蕾期以降に発生すると防除が困難になりますので、出蕾までの防除を徹底します。
- 2) 薬剤防除は、薬剤が葉裏や新芽にかかるように、動力噴霧機の圧力をやや弱くし丁寧に散布します。
- 3) 薬剤耐性の発達を防ぐため、同一系統剤の連用は避けます。

(3) 炭疽病

予報内容 **発生時期： 平年並** **発生量： 平年並**

予報の根拠

- 1) 9月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は13%、発病株率0.3%でした。

防除上の注意事項

- 1) 保菌苗を定植した場合、ビニール被覆までは降雨により発生が拡大します。
- 2) 定植後の過剰なかん水を避け、ほ場の排水に努めます。
- 3) 萎凋株や枯死株は早期に抜き取り、肥料袋等に入れ密封し、ほ場外へ持ち出し処分します。
- 4) 本ほ場で発生した場合、セイビアーフロアブル 20、ゲッター水和剤（収穫開始 21 日前まで）等により二次感染を予防します。

2. ナ ス

(1) 褐色腐敗病

予報内容 **発生時期： 平年並** **発生量： やや少ない**

予報の根拠

- 1) 9月下旬の巡回調査では、発生を認めていません。
- 2) 今後の秋雨や台風による風雨で多発する可能性があります。

防除上の注意事項

- 1) 被害枝葉および果実は伝染源となるので、早期には場外へ持ち出して処分します。
- 2) 病原菌は水によって伝染するため、ほ場及び畝上の排水を良くし、マルチによって降雨による「はね上がり」伝染を回避します。
- 3) 台風などの強風を伴う降雨後はできるだけ早く、ホライズンドライフロアブル、ランマンフロアブル等により防除します。

(2) うどんこ病

予報内容 **発生時期： 平年並** **発生量： やや多い**

予報の根拠

- 1) 9月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は83%、発病葉率は20.7%でした。

防除上の注意事項

- 1) 防除前には、必ず下葉の発病葉を摘葉し、薬液が葉裏や新芽にかかるように、動力噴霧機の圧力をやや弱くして丁寧に散布します。
- 2) 薬剤耐性菌の発生を防ぐため、同一系統剤を連用せず、予防に努めます。特に、QoI 剤や DMI 剤などは耐性菌の発生リスクが高いため、連用は控えます。

(3) ミナミキイロアザミウマ

予報内容 **発生時期： 平年並** **発生量： 平年並**

予報の根拠

- 1) 9月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は50%、被害果率は5.3%でした。

防除上の注意事項

- 1) 被害果が発生していない場合の防除は不要ですが、多発ほ場ではファインセーブフロアブルなどで防除します。
- 2) 多くの殺虫剤に対する感受性が低下していますので、十分な防除効果が得られない場合は、各農林(農業)振興事務所または病害虫防除所にご相談いただくとともに、次年度作以降の天敵保護利用体系の導入をご検討ください。

3. ホウレンソウ

(1) 萎凋病

予報内容 **発生時期： 平年並** **発生量： 平年並**

予報の根拠

- 1) 9月下旬の巡回調査では、発生を認めていません。

防除上の注意事項

- 1) 発病株はほ場の菌密度を上げるので、見つけ次第除去するとともに、収穫残さはすき込まず、ほ場外に持ち出して処分します。
- 2) 発生ほ場では、来年の6月以降にクロピクフロー、ソイリーン等の土壌くん蒸剤で処理するか、夏期に太陽熱による土壌消毒を実施します。

(2) ベと病

予報内容 **発生時期：平年並** **発生量：平年並**

予報の根拠

- 1) 9月下旬の巡回調査では、発生を認めていません。

防除上の注意事項

- 1) 今後、天候不順が続くと、発生しやすい条件となりますので、施設内の高湿度を避けるため、換気と排水対策を徹底します。
- 2) 発病株は伝染源となるので、見つけ次第、除去処分するとともに、収穫残さはハウス周辺には放置せず、袋に入れて密封し、腐熟させてから処分します。
- 3) レース1～10抵抗性品種でも発生する可能性がありますので、天候不順が続く場合には、ランマンフロアブル、レーバスフロアブル等で予防します。

(3) ホウレンソウケナガコナダニ

予報内容 **発生時期：平年並** **発生量：平年並**

予報の根拠

- 1) 9月下旬の巡回調査では、発生を認めていません。

防除上の注意事項

- 1) 本葉2葉期のカスケード乳剤、4～6葉期のアファーム乳剤の散布を組み合わせた体系防除を行います。
- 2) 間引き株や収穫残さは増殖源となりますので、ハウスの外に持ち出し処分します。
- 3) 土づくりに未熟な有機物（稲わら、もみがら、未熟な牛糞堆肥等）を投入すると発生を助長します。できるだけ腐熟させた堆肥を利用し、過剰な投入を避けます。

(4) シロオビノメイガ

予報内容 **発生時期：平年並** **発生量：やや少ない**

予報の根拠

- 1) 9月下旬の巡回調査では、発生を認めていません。

防除上の注意事項

- 1) ほ場をよく観察し、発生が見られたら、幼虫が小さいうちに防除します。多発時は複数回の防除が必要です。
- 2) 4mm目の防虫ネットはハスモンヨトウやヨトウガには効果がありますが、体の小さいシロオビノメイガは侵入しますので注意します。
- 3) 収穫後の不要な残り株は、速やかに抜き取り処分します。

4. ネギ

(1) ベと病

予報内容 **発生時期：平年並** **発生量：平年並**

予報の根拠

- 1) 9月下旬の巡回調査では、発生を認めていません。

防除上の注意事項

- 1) 降雨が続く場合は殺菌剤の予防散布を行います。特に春に発生したほ場では注意します。
- 2) 発病株は伝染源となるため、ほ場内にすき込まずに持ち出して処分します。

(2) ネギハモグリバエ

予報内容 **発生時期**：平年並 **発生量**：平年並

予報の根拠

- 1) 9月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は100%、被害葉率は15.0%でした。
- 2) 令和3年度県内で発生を初確認したバイオタイプBは11月以降も発生しますので注意します。詳細は令和3年12月16日付病害虫発生予察特殊報第1号をご覧ください。

防除上の注意事項

- 1) 発生ほ場では、株元の土中で蛹が越冬します。収穫後に残った被害株は速やかにほ場外に持ち出して処分するとともに、春の作付けまでにバスアミド微粒剤でくん蒸を行って、土中の蛹を防除します。

(3) ネギアザミウマ

予報内容 **発生時期**：平年並 **発生量**：やや多い

予報の根拠

- 1) 9月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は100%、被害葉率は54.0%でした。
- 2) 秋に向かって発生は漸減します。

防除上の注意事項

- 1) ベリマークSCの生育期もしくは育苗トレイへの株元灌注処理を行います。再発生が見られた場合はスピノエース顆粒水和剤などを散布します。散布の際、ネギは薬液をはじきやすいので、スカッシュ、まくぴかなどの展着剤を加用します。
- 2) ネギアザミウマは休眠性がなく、今後も発生は継続します。気温が高い間は増加に注意します。

5. キ ク

(1) 白さび病

予報内容 **発生時期**：平年並 **発生量**：平年並

予報の根拠

- 1) 9月下旬の巡回調査では、発生を認めていません。

防除上の注意事項

- 1) 発病葉は伝染源となるため、ほ場内に放置せず、持ち出して埋没等により処分します。収穫後の株も放置せず、同様に処分します。
- 2) 降雨が続く場合は、早めにジマンダイセンフロアブル等で予防します。発生初期には、必ず下葉の発病葉を摘葉してから、SDHI剤のカナメフロアブル、DMI剤のラリー乳剤等、またはハチハチ乳剤で防除します。その後は、降雨があれば1週間以上の間隔で上位葉を中心に防除を行います。ただし、薬剤耐性菌が出現する恐れがありますので、同一系統剤の連用は避けます。
- 3) 罹病性品種を収穫後も親株として利用する場合、次年度の伝染源とならないように、下葉かきと継続的な薬剤散布による予防を行います。

(2) 褐斑病・黒斑病

予報内容 **発生時期**：平年並 **発生量**：平年並

予報の根拠

- 1) 9月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は40%、発病株率は2.6%でした。

防除上の注意事項

- 1) 密植や過繁茂にならないよう通風を図るよう管理します。
- 2) 発生ほ場では下葉の発病葉を直ちに除去し、埋没処分します。
- 3) 発生初期にダコニール1000等で防除します。

6. 野菜類・花き類共通

(1) ハスモンヨトウ

予報内容 **発生時期**：平年並 **発生量**：平年並

予報の根拠

- 1) 農業研究開発センター（桜井市池之内）における9月のフェロモントラップでの誘殺数は平年並で推移しています。
- 2) 9月下旬の巡回調査における発生ほ場率は、ハウレンソウでは33%でした。ナス、イチゴ、ネギ、キクでは発生を認めていません。

防除上の注意事項

- 1) ほ場内では若齢幼虫から老齢幼虫まで見られます。老齢幼虫に対する薬剤の効果は劣るので、若齢期の防除に努めます。
- 2) 施設内では冬期も発生が続きます。防除のもれ落ちがないように、ほ場をよく観察し、必要があれば再度防除します。
- 3) イチゴほ場では、寒冷紗等に産卵する可能性があるので、苗の活着後できるだけ早く除去します。また、ビニール被覆前後の防除を徹底します。
- 4) ハウレンソウの雨よけ栽培では、4mm目の防虫ネットをハウスサイドに張り、夕方に戸締まりをすると、夜間の成虫飛来を阻止でき、産卵量を減少させることができます。
- 5) 各種殺虫剤に抵抗性の発達したハスモンヨトウが発生しています。防除薬剤の選択に注意すると共に、薬剤の効果に疑問を感じる場合は、各農林(農業)振興事務所または病害虫防除所にご相談ください。
- 6) 令和7年9月17日付けで発表しております令和7年度病害虫情報第5号もご覧ください。

(2) シロイチモジヨトウ

予報内容 **発生時期：平年並** **発生量：多い**

予報の根拠

- 1) 農業研究開発センター（桜井市池之内）における9月のフェロモントラップでの誘殺数は平年よりも多く推移しています。
- 2) 9月下旬の巡回調査における発生ほ場率は、ハウレンソウでは67%、ネギでは50%でした。キクでは発生を認めていません。
- 3) 令和7年9月17日付けで発表しております令和7年度病害虫情報第5号もご覧ください。

防除上の注意事項

- 1) 各種殺虫剤に抵抗性の発達したシロイチモジヨトウが発生しています。防除薬剤の選択に注意すると共に、薬剤の効果に疑問を感じる場合は、各農林(農業)振興事務所または病害虫防除所にご相談ください。

(3) オオタバコガ（ナス、キク）

予報内容 **発生時期：平年並** **発生量：多い**

予報の根拠

- 1) 農業研究開発センター（桜井市池之内）における9月のフェロモントラップ誘殺数は、平年よりも多く推移しています。
- 2) 9月下旬の巡回における被害発生ほ場率は、ナスでは17%、キクでは40%でした。
- 3) 気温の低下とともに発生は終息へ向かいます。
- 4) 令和7年9月17日付けで発表しております令和7年度病害虫情報第5号もご覧ください。

防除上の注意事項

- 1) 果実等の内部に食入している幼虫には、薬剤が直接触れないので防除効果が劣ります。花蕾や新芽付近をよく観察して、ふ化～若齢幼虫期に防除を行います。

(4) ハダニ類（イチゴ・キク）

予報内容 **発生時期：平年並** **発生量：平年並（キク）**
やや少ない（イチゴ）

予報の根拠

- 1) 9月下旬の巡回調査における発生ほ場率は、イチゴでは13%、キクでは60%でした。

防除上の注意事項

- 1) イチゴ本ぽで発生した場合、古葉を取り除いてから防除を行います。
- 2) ナミハダニ黄緑型は殺虫剤感受性の低下が進んでいますので、イチゴでは10月中旬に天敵製剤を導入します。
- 3) イチゴで天敵製剤を使用する場合は、天敵に影響の大きい殺虫剤が使用できません。詳細は、各農林(農業)振興事務所または病害虫防除所へお問い合わせください。

(5) アブラムシ類

予報内容 **発生時期：平年並** **発生量：平年並**

予報の根拠

- 1) 9月下旬の巡回調査における発生ほ場率は、イチゴでは13%、ナスでは17%、キクでは20%でした。ハウレンソウ、ネギでは発生を認めていません。

防除上の注意事項

- 1) イチゴでは秋期の防除を徹底します。ハダニの天敵製剤を導入する場合は、天敵への影響が小さいコルト顆粒水和剤またはトランスフォームフロアブルを使用します。ただし、これらの薬剤はミツバチへの影響日数が長いので、使用時期に注意します。
- 2) アブラナ科野菜では、ウイルス病を媒介するので発生初期に防除します。
- 3) 寄生部位に確実に薬液が付着するよう、散布目標を確認してから散布します。
- 4) ワタアブラムシやモモアカアブラムシは、薬剤抵抗性が発達しやすいので、同一系統薬剤の連用を避けます。
- 5) ネオニコチノイド系薬剤の効果が低いワタアブラムシが発生しています。薬剤の防除効果が低い場合には、各農林(農業)振興事務所または病害虫防除所にご相談ください。

(6) アザミウマ類 (ミカンキイロアザミウマ (イチゴ、キク))

(クロゲハナアザミウマ (キク))

予報内容 **発生時期：平年並** **発生量：平年並**

予報の根拠

- 1) 9月下旬の巡回調査では、ミカンキイロアザミウマの発生を認めていません。クロゲハナアザミウマはキクでは発生ほ場率20%でした。

防除上の注意事項

- 1) イチゴでは、ほ場周辺に花き類を植栽したり、ハウス内に鉢花を持ち込むと発生源となります。花き類は処分し、鉢花の持ち込みは控えます。
- 2) イチゴでは、秋に侵入したアザミウマが冬期に増殖します。ハウスサイド締め切りまでに防除を徹底し、ハウス内に残さないようにします。
- 3) キクでは、着蕾から開花前に防除します。またミカンキイロアザミウマでは、収穫後の2番花や親株は、好適な増殖場所であると同時に越冬場所ともなりますので、花を処分するか、冬期までに防除を行い、次年度への越冬量を減らします。
- 4) クロゲハナアザミウマは主に葉裏に寄生します。ハダニの被害と間違えやすいので注意して観察します。
- 5) ミカンキイロアザミウマは、ファインセーブフロアブル、クロゲハナアザミウマはジェイエース水溶剤、トクチオン乳剤の効果が高いです。なお、これら薬剤の使用にあたっては、品目毎の登録内容を確認してください。
- 6) 両種ともに各種薬剤に対する感受性が低下した個体群を確認しています。同一系統薬剤の連用は控え、防除効果に疑問を感じた場合は、各農林(農業)振興事務所または病害虫防除所にご相談下さい。

(7) チャノホコリダニ (イチゴ、ナス)

予報内容 **発生時期：平年並** **発生量：平年並**

予報の根拠

- 1) 9月下旬の巡回調査では、発生を認めていません。

防除上の注意事項

- 1) 虫体が極めて微小ですのでルーペでも見えません。イチゴでは被害に気付いてからの防除は困難ですので、予防散布します。
- 2) 服の袖などについて移動しますので、露地ナスで対面作業を行った後にそのままイチゴ本ぽに入るのは控えます。

※農薬に関する情報は、令和7年9月29日までの農薬登録情報に基づいて記載しています

お問い合わせは

奈良県病虫害防除所

TEL. 0744-47-4481

その他関連情報は以下をご覧ください

病虫害防除所/奈良県公式ホームページ

<http://www.pref.nara.jp/1557.htm>

奈良県農薬情報システム（農作物病虫害・雑草防除指導指針）

<http://www.nouyaku-sys.com/noyaku/user/top/nara>